

教師のゼミ室(英語)ー日本人の英語の先生としてできること: ポストコロナ社会に求められる国際コミュニケーション教育ー実施報告

水倉 亮 (明治大学国際連携機構特任講師)
陣野 俊彦 (東京都立大島海洋国際高校)

1. 日時

2021年5月22日(土) 15時~17時

2. 開催方法

Zoomによるオンライン開催

3. 参加者数

36名参加

明治大学教育会会員並びに明治大学で教員免許状取得を目指す学生及び科目等履修生

4. パネリスト略歴

水倉 亮

明治大学情報コミュニケーション学部情報コミュニケーション学科卒業。明治大学在学中、スウェーデン リンシェーピン大学教育科学部にて交換留学生として滞在し、スウェーデンの教育制度および社会福祉制度について学ぶ。イギリス ロンドン大学ユニバーシティカレッジの教育研究所にて応用言語学および英語教育について学ぶ。現在はスペイン リェイダ大学地域文化遺産研究科 応用言語学専攻の博士課程に在籍。専門分野は応用言語学。研究テーマはトランスリンガリズム (Translingualism)、教員および学生のアイデンティティについて。私立高等学校教員、立命館アジア太平洋大学 言語教育センター英語科非常勤講師および嘱託講師を経て現職。

5. 講演の概要

2021年は大学入試センター試験が廃止され、大学入学共通テストが実施された。英語の試験問題の内容や形式も変更された。センター試験では必ず問われていた発音や文法に関する問題が無くなった。メールやスマートフォンでのテキストメッセージのやり取りは、一見実践的な英語の使用を反映しているように思えるが、試験の問題文で使われている英語の表現によっては、それが問題になる場合があり、学習指導要領の記載内容との齟齬の可能性も見られることを指摘した。(図1)

また、日本の英語教育を含めた外国語教育全般に関して、日本社会に実際にある国際化を反映していない可能性についても説明した。日本社会では英語を母語とする在留外国人よりも、中国語、韓国語、ポルトガル語、フィリピン語、ベトナム語を母語とする方が多い。

図1 学習指導要領内容抜粋及び分析

はじめに

1. 第1章 総説 第3節外国語科の目標 (p. 12) より

... 外国語やその背景にある文化を理解するなどして相手に十分配慮したりすることが重要であることを示している。また、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し...

2. 第2章 外国語科の各科目 第2節 英語コミュニケーション I (p.45) より

電子メールでは、差出人、受取人、日付、件名、本文などの基本的な構成については中学校の外国語科で既に学習しているが、送る相手や目的などに応じて英文の表現形式が異なることなどに留意させる。

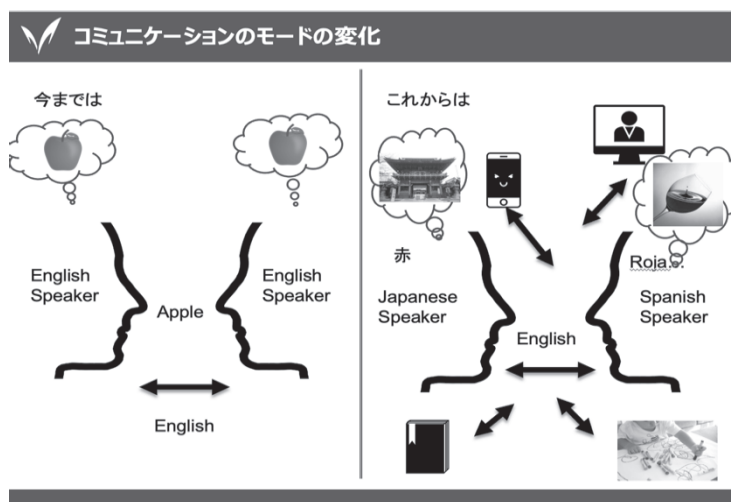
⇒先ほどのメールの内容は外国語やその背景にある文化を理解し、相手に十分配慮された内容であったのか？

⇒送る相手や目的に応じた表現形式が異なることに留意したメールであったのか？

高等学校学習指導要領 (平成30年告示)解説 外国語編 英語編より

しかし、小学校で導入された外国語活動では英語に限定されていないにもかかわらず、英語が優先して指導されてきた。英語＝外国語＝国際化のように単純化して認識される傾向があるが、実際の日本社会の国際化の現状はより複雑である。海外から日本へ移住してくる外国人も、受け入れる側の日本人もお互いの言語について、母語のように使うことができるという前提の下、意思疎通を図ることはできない。そのような場合には、自分が知っている単語を話してみたり、文字を書きしてみたり、絵を書きしてみたり、スマートフォンで写真を見せてみたりと、さまざまな手段を使ってコミュニケーションを取る必要がある。このコミュニケーションモードの変化についても説明した。(図2)

図2 コミュニケーションモードの変化イメージ図



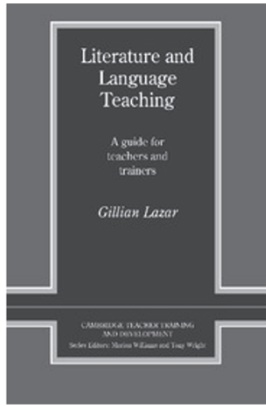
次に、学校教育現場に大きな影響を与えている「英語は英語で基本的に指導する」という学習指導要領に記載された指導方針について、応用言語学の見地から日本の英語教育における実施可能性と教育効果を批判的に検討した。カナダのフランス語教育で用いられた、イ

マージョン教育について取り上げた。イマージョン教育では、学校生活の全てをフランス語で行い、母語と同じようにフランス語を習得できるように指導される。しかし、英語を母語とする生徒たちは、イマージョン教育を受けたとしてもフランス語母語話者のような文法の正確性を獲得することはできなかった。すなわち、英語と比較的に似ているフランス語でも難しいのであれば、英語と性質が大きく異なる日本語の母語話者にとっては同様の方法で英語を習得することは難しいと指摘した。

また、近年「日本人が英語を話すことができない原因である」と批判されてきた文法訳読法についても、再検討の必要性を説明した。特に、文学作品は翻訳することで日本文化と英語圏の文化を比較することができ、教育効果が高い。(図3)

図3 文学作品の訳読の教育的効果について

英語教育に異文化を取り入れる手段はALT だけではない



映画的一幕から簡単な異文化に関する議論 1

日本語では店員さんは、「いらっしゃいませ」と言いますが。英語では店員さんは、「**Welcome**」とは言いませんでしたね。

なぜだと思いますか？

イギリスの文学作品の一言から始める異文化に関する議論 2

After this movie was over, we came to a very cozy café.
James said to me, "**how do you fancy?**"

この"How do you fancy?"はどのような意味でしょうか？

© Meiji University. All rights reserved.

最後に、「書き言葉」において文法的な正確性がより重要であると説明した。「話し言葉」はその場で消えてしまうものだが、「書き言葉」は目で見確認できるだけでなく、記録として残る。ビジネスや学術の世界では書面で使用される文書について、英語の表現の質で能力や立場などが判断されることがあることを指摘した。学習指導要領においては「知らない語句や表現に出会うたびに辞書を使用するのではなく、生徒がすでに有している知識や既習事項を使って、新しい語句や文を理解することができるように指導することが大切である。」と記載されている。もちろん会話において辞書を多く使用することはできないが、書き言葉においてはむしろ習得難度の高い単語を辞書を活用しながら使用する必要があることを指摘した。また、言語の機能や使用する場面の違いを想定して、柔軟に指導法を変える必要があり、「オールイングリッシュ」にこだわりすぎることの弊害について説明した。

6. 指定討論者の感想について

「先生、なぜ日本人なのに英語を勉強しなければならないのですか」。生徒がよく不満とともに口にする言葉を紹介しながら、英語教育の目的観を問う発問をした。本講演で水倉先生の指摘の数々の結果、上述のような問いが生まれるのではないか。在日外国人の第一言語や仕事で英語を使う日本人の割合を考えると、英語教育の目的を再考せざるを得ない。それよりもお互いに母国語を話せない人同士がコミュニケーション手段として用いたり、大学に進学する生徒だけではなく、より多様な目的に応じた英語学習の機会、また英語以外の言語にもアクセスできる機会も必要だろう。

『日本人にとって英語とは何か』（大谷泰照著）から、多くの日本人が英語＝国際語＝外国語と考える要因を提起した。日本人に根強い中央語思考の存在を見落とすことができないと氏は指摘した。方言は嘲笑や矯正すべきものとして捉えられる。また方言から共通語に対して働く中央語思考が、世界の方言である日本語から、世界の共通語である英語に向けても強気に働き続けると喝破する。日本の中での日本語教育に対しても認識を新たにしなければならない。

最後に英語授業における日本語の効用である。立教大学の鳥飼 玖美子先生の言葉を紹介しながら、実際の授業における日本語使用を議論した。「生徒の疑問を上手にすくい出して、日本語と関連づけて説明できる先生が、生徒の興味を引き出すことができる」。周知の事実ではあるが、日本語と英語との違いは枚挙にいとまがない。数々のスローラーナーを指導した経験から、日本語との違いに戸惑い理解を諦めてしまう生徒も多い。彼ら彼女らに英語の授業を全て英語、とは酷な話であろう。冒頭で指摘した英語学習の目的と照らし合わせ、授業手法も適宜日本語を用いながら、英語の理解を促すのが適切だ。

「日本人の英語の先生としてできること」感想

明治大学教育会長 田中 徹太郎

現在の日本では、英語以外の外国語に注視する土壌があまり育ってないようだ。現実には、日本で外国人と英語のみの対話機会は極めて少ない。多様化、多言語の国際社会では、バイリンギアルからトランスリンギアルへシフトし、自己のランゲージ資源を使いながら多様な人々とのコミュニケーションが大切であるとの水倉先生の分析は、傾聴に値する。言語活動は、背景にある各国の文化に着目することで、コミュニケーションが重層的に進化する。こうした、水倉先生の主張される使用言語の横断的拡張と固有文化への親和性のリンクは、隣人としての多くの人々との交流、理解をより生き活きとさせるであろう。

英語習得については、オール・イングリッシュだけでは、難しい。文法訳読法により文法の正確性を獲得することは、スピーチがライティングの産物であることを考えると極めて

重要である。世界標準英語の基準は、「書き言葉」である。母語で正確に表現できる能力を高め、英語に書き換えていく。こうした、水倉先生の主張は、現在の我が国の語学教育に警鐘を鳴らすものである。ただの、チャットだけを目指すのではなく、会話は意見交換の場であり、思索の表現の核を形成する。これは、一部のキャリアだけに求められることではない。人間存在への畏敬から発露された尊いグランドデザインと言えよう。